

北海道：19世紀から現代まで

1869 年、明治政府（前年に新しく発足）は正式に蝦夷地を日本の一部とし、北海道と改名しました。これはアイヌにとって転換点となり、苦難と文化的同化の時代の始まりとなりました。日本国民として宣言されたアイヌは、民族的アイデンティティを奪われました。伝統的な狩猟地や漁場は取り上げられ、子どもたちは学校で日本語のみを話すことを強制されました。

何世代にもわたり、アイヌは土地と調和して暮らし、その自然資源に頼って生活してきました。しかし、屯田兵として知られる政府が後援する農民兵士の到来は、彼らの生活様式を劇的に変えてしまいました。屯田兵は農地開拓のための森林伐採と、ロシアの脅威からの日本の北方国境の防衛という任務を負っていましたが、アイヌにとって彼らは先祖伝来の土地の没収と自治の喪失を意味していました。

1899 年、政府は北海道旧土人保護法を制定しました。これはアイヌを保護する手段として提示されましたが、実質的には彼らを日本文化に同化させるものでした。アイヌには日本名が与えられ、農業を営むことを奨励され、母語を話すことは抑制されました。このような政策にもかかわらず、アイヌ文化は存続してきました。20 世紀を通じて、アイヌの活動家たちは土地の返還と北海道旧土人保護法の廃止を求めて抗議と請願を続け、保護法は 1997 年につい

に廃止されました。今日、工芸、儀式、口承伝統は、アイヌの歴史と文化を次世代のために
継承しています。